

長崎系カトリック用語の全国伝播 — 守り継がれる「ゼンチョ」、移りゆく「旧信者」 —

発表者 小川俊輔¹

1. 研究の目的と背景

小川(2011)は、日本のカトリック教会には、専ら長崎とその周辺地域でのみ用いられる「長崎系カトリック用語」の存在を報告している。「カトリック信者」の意の「キリシタン」(同2007a)、「神父」の意の「パーテルサマ」「バーテレサマ」「バテレン」(同2007b)、「聖母マリア」の意の「サンタマリア」類(同2007c)、「祈祷文」の意の「オラショ」類(同2012)、「イエス・キリスト」の意の「ジェズス」「ゼスス」類(同2014)などである²。

しかし、これらの調査研究は、九州地方における実地調査に基づくものであるため、全国の状況が分からない。本発表は、これを解明しようとする。

2. 先行研究と研究方法

「長崎系カトリック用語」の全国分布に関する先行研究はない(一般のカトリック用語、キリスト教用語の全国分布についても同様)。そこで、1. に挙げた一連の研究を踏まえ、30の調査項目からなる調査票(A4判片面17ページ)を作成し、全国971のカトリック教会に郵送し、調査を依頼した。回答者(調査対象)をカトリック信者の方に限定したのは、九州地方300地点における実地調査の結果、「長崎系カトリック用語」のほとんどは、(長崎の)カトリック信者のみに使用されていたからである。

本発表では、「ゼンチョ」と「旧信者」の2語を取り上げ、調査結果を言語地図化し、文献資料や教会史、移住史などの成果に基づき、言語地図の解釈を行う。つまり、「地理言語学」の方法により、方言の伝播、維持、変容の実態とその背景を明らかにする。

3. 調査の概要

調査票の郵送先は、カトリック中央協議会出版部編(2013)に「教会」として示されていた全国971箇所のカトリック教会である(巡回教会や礼拝堂も含まれている)。調査票の発送は2014年3月であった。回収数は439、回収率は45.2%であった。ほとんどが同年5月末までに返送され、遅い場合でも7月末頃までには返送いただけた。極めて共時性の高い資料が得られたと考えられる。回答者(被調査者)の条件として、以下の文言を記した。

ご回答くださる方(1名)をお決めいただくにあたって

- ① 皆さんが所属する教会(教区)に暮らしていらっしゃる信徒の方。
- ② 教会(教区)で話されていた(昔の)キリスト教用語についてご存じの方。
※ おおむね60歳以上の方。多くの場合、70歳代くらいの方になるでしょうか。
- ③ よその土地(教区)で暮らした経験がある方でも構いません。
- ④ 性別は問いません。
- ⑤ 「お若い方が年配の方に対して調査票の質問文を読み上げ、その回答を調査票に書き込む」という方法をとられても構いません。

¹ おがわ しゅんすけ(県立広島大学) bach@pu-hiroshima.ac.jp

² 『発表原稿集』では、紙幅の都合上、地図は割愛する。発表の際に投影する。

Fig.1
回答地点



〈1〉 イソポその夜家の猫を散々に打擲せられたところで、エジツトの国はゼンチヨで猫崇敬するによつて、旅宿の亭主がこの由を奏聞すれば

(『天草本伊曾保物語』1593年刊、『吉利支丹文学集』2, p.258)

〈2〉 その眷属の内よりちからなき孤児となるものこれ多し。その例キリシタンにあらざるゼンチヨの上に明かに現はるるものなり

(『どちりなきりしたん』1600年刊、『キリシタン教理書』, p.85)

〈3〉 切支丹の御教を聴聞したらんぜんちよ、ばぶちずもの望深しと雖、授手なきゆへ力に及ばざる時は

(『胡無知理佐死之略』1869年刊、『明治文化全集 第19巻 宗教篇』, p.61)

なお、『日本国語大辞典』(第2版)は、「ゼンチヨ」について「ゼンチヨ[名](ポルトガルgentio)キリシタン用語。異教徒。異端者。未信者。」と記している。



4.3 「ゼンチヨ」の分布の解釈

OGAWA (2010) は、この語の長崎県における分布を報告しているが⁴、今回の調査の結果、この語は、関東から九州までの太平洋ベルト地帯にも分布することが分かった。Fig.1と Fig.2を見比べれば、同地帯に移住した信者(またはその子孫)が、「ゼンチヨ」を使用し続けてきたことが見てとれる。さて、長崎のカトリック信者の太平洋ベルト地帯への(集団)移住については、多くの報告がある。

〈4〉 北九州市小倉の福音宣教開始は1889(明治22)年。当時この町には長崎県出身の旧信者約40人が近くの炭鉱労働者となって住んでいた。小倉はもともと何の変哲もない田舎町にすぎなかったが、1895(明治28)年、陸軍第12師団がおかれたことで急速に発展。工業、商業の中心となるにつれ、長崎からの信者の移住も増えた。門司には1897(明治30)年頃から、船の石炭荷役に働く長崎出身の信者約40人がいた。戸畑、若松両市の信者たちのため、戸畑に巡回教会が出来たのもこのころである。大正末期まで現在の北九州市には、小倉にしか教会はなく、広い地域に散在する信者(その多くは長崎出身の旧信者)にとって小倉まで日曜日のミサに出かける

⁴ 『発表原稿集』では、紙幅の都合上、地図は割愛する。発表の際に投影する。

のは大きな犠牲であった。

(伊東誠二監 (1978) 『萌芽 福岡教区 50 年の歩み』 (pp.25-34) を整理して掲示)

〈5〉 ◆まるで移住者の教会 泉佐野教会 (大阪教区) の場合

南大阪の工場地帯にはサベリオ宣教会担当の岸和田, 貝塚, 泉佐野の三小教区があり, この三教会ともそれぞれ, 多少にかかわらず「地方出身信者」をかかえている (中略) しかし何といても泉佐野教会の現情は異色である。そこではすなわち全信徒数 1020 名中地元の信徒は 200 名そこそこで, 残りの 820 名は地方出身者である, 正に「移住者の教会」の観があるからである。しかもその「地方出身者」の大部分が長崎県 (平戸, 五島地区が多い) 出身であり, その中家族ぐるみの移住者 (115 家族) を除いた 500 人以上は独身の若い男女である (内 3 分の 2 は女性) 点にも特色がある。

(『カトリック移住タイムズ』第 43 号(2)面, 1968 年 1 月 5 日発行)

〈6〉 ◆移住信者の住宅づくり—名古屋港教会の場合

熱田教会も重要である。何しろ全信者 800 名の中 600 名以上が長崎県の出身者であるといわれるのだから……。しかし港教会の実情はこれらとは聊か異なった問題と取り組んでいる (中略) この教会は創立以来 3 年を過ぎたばかりの新設教会である関係もあり, 信徒も 220 名とつつましかである。しかし約 150 名 (70%) の長崎出身の移住者をかかえているのである。またこの港教会の特徴は独身者は少数 (2~30 人) で, 大部分が家族もちである点である。彼等の出身地は平戸, 五島, 黒島あたりが多く, 主として船舶関係の仕事に従事している。

(『カトリック移住タイムズ』第 43 号(2)面, 1968 年 1 月 5 日発行)

丸山 (1980) は五島のカトリック集落を文化人類学の方法で調査した研究書である。その中に「ミヤコへ行く若者たち」と題する章が設けられ, 以下のような記述が見られる。

〈7〉 最近では, 地方出身のカトリック信徒たちが都会での生活になれ, 信仰を続けてゆきやすいように, 教会側でも特別の努力を払うようになってきた。東京, 横浜, 名古屋, 一宮, 大阪, 西宮, 広島, 長崎, 大分, 福岡の各教区には, 「移動信徒」と呼ばれるこれら地方出身の若いカトリック信徒たちの信仰を激励し, 彼らの生活全般について世話をしたり相談にのるために, 連絡事務所や移動協議会が設けられている。(p.209)

〈8〉 関西, 中京地方では中学卒業後転入して来た移動信徒が多いが, 東京への移動信徒には高校卒の者が比較的多い。東京教区は, 行政区画とは別に, 東京二三区, 多摩地区, 千葉県などを含んでいる。ここでも, 集団就職よりは職安や縁故を通して個人として就職してくる者が比較的多い。(p.211)

〈9〉 昭和 55 年当時の名古屋教区における移住信徒の約 80%が長崎出身者 (p. 215)

◎表 1 長崎教区転出者統計 (発表時に投影)

■長崎系カトリック用語「ゼンチョ」が太平洋ベルト地帯に分布するのは, 長崎出身信者の同地帯への (集団) 移住が行われたからであろう。

■「ゼンチョ」は, 長崎での実地調査では, 意味が変容していた (OGAWA (2010))。しか

し、今回の郵送調査では、そのような事例は見られなかった。なぜか？
 一都会では、他者の信仰が何であるかを意識することが少ない？
 →「ゼンチョ」が使用されにくい →変容しない。
 一わざわざ回答（記載）しようとしなかった（郵送調査の限界？）

5. 移りゆく「旧信者」

- ・「旧信者」との出会い ボリビアの日本人移住地にて 写真1（発表時に投影）
- ・同移住地における「旧信者」の意味＝「ボリビア移住以前からのカトリック信者」

5.1 「旧信者」の分布



Fig.3 は、「旧信者」の調査結果を示す。質問文は以下のとおり。

(30) 以前、教会では「旧信者(きゅうしんじゃ)」「新信者(しんしんじゃ)」という言葉が使われたことがあったようです。この言葉について、①～③の中から該当するものを選び、○数字を○で囲んでください。

旧信者

①使う・使っていた ②聞いたことはあるが、使わない ③聞いたこともない

①・②を選ばれた方は、「旧信者」という言葉の意味を教えてください。

意味：

新信者

①使う・使っていた ②聞いたことはあるが、使わない ③聞いたこともない

①・②を選ばれた方は、「新信者」という言葉の意味を教えてください。

意味：

5.2 「旧信者」の文献史

- 〈10〉 découverte si merveilleuse des anciens Chrétiens (『パリ外国宣教会年次報告』1868年刊, パリ外国宣教会 HP の電子アーカイブス (<https://archives.mepasie.org/fr/lettres/lettre-nadeg-28>))
- 〈11〉 その中の幾家族かは我久賀島にも住みこんで、山林を開墾しながら窃かに先祖伝来の切支丹宗門を信奉して、黒船の渡来を待つのであった。現在のカトリック信者、及び各所に散在して居る「サガリ」, 「旧信者」が其等の子孫である。
(同島の信者 (1931) 『教報』, カトリック浜脇教会 HP (<http://frsimoguchi.web.fc2.com/hama/shunin21.html>))
- 〈12〉 大正末期まで現在の北九州市には、小倉にしか教会はなく、広い地域に散在する信者 (その多くは長崎出身の旧信者) にとって小倉まで日曜日のミサに出かけるのは大きな犠牲であった。 (〈4〉の末尾再掲。伊東誠二監 (1978))
- 〈13〉 「新信者」と「旧信者」という言葉をよく聞く。この言葉はどのように区別されて使われているのだろうか。どこまでが「新信者」で、いつから「旧信者」になるのだろうか▼全国的に、この区別があるのだろうか。あるいは、ある地方に独特なものだろうか。ある子どもが親に言ったという。「お父ちゃんは新信者だけど、僕は赤ちゃんのときに洗礼を受けたから旧信者だよね」。(中略) 教会活動を熱心に行っていると「新信者のくせに、洗礼を受けたばかりで何も分からないのに…。祈りは全然しないで、活動ばかりしている」「私は先祖代々の信者。伝統がある。新信者はまだ駆け出し。教会のことが分かるはずがない」など。
(「地の塩」(『カトリック新聞』連載コラム), 1995年11月12日発行)

以上の記述から分かることを整理する。■「旧信者」の原型は、幕末に来日したフランス人宣教師が用いた anciens Chrétiens。意味は「潜伏キリシタン」〈10〉。■1931年頃のカトリック信者にとっての「旧信者」は禁教令が解かれた後も潜伏形態の信仰を続ける「カクレキリシタン」である〈11〉。■1978年刊『萌芽 福岡教区50年の歩み』に拠ると、当時のカトリック指導者は「旧信者」を「潜伏キリシタンを先祖に持つ信者」の意で用いていた〈12〉。■1995年の『カトリック新聞』の記事によると、「幼児洗礼を受けた信者」「先祖代々の信者」等、意味に揺れが見られる〈13〉。Fig.3は、以上の歴史を反映している。

5.3 「旧信者」の分布の解釈

5.2に記した文献史および分布の状況から、Fig.3は次のように解釈できる。Fig.3における最古の事象は■「先祖が潜伏(カクレ)キリシタン」の信者。分布の中心は禁制、潜伏、復活の歴史を持つ長崎。長崎の信者の移動・移住に伴い、この意味の「旧信者」が太平洋ベルト地帯に運ばれた。それぞれの地で世代交代が進むにつれ、「旧信者」は▶「幼児洗礼を受けた信者」という意味を獲得する▶の分布域も太平洋ベルト地帯を中心としているため、長崎出身信者の周辺でこの意味での「旧信者」の使用が始まったと考えてよい。

以上2つの意味と異なり、◊「第2次大戦前の洗礼者」、☾「第2バチカン公会議前の洗礼者」は、原義「潜伏キリシタン(→カクレキリシタン)」(〈10〉〈11〉)から断絶している。分布も太平洋ベルト地帯に偏らず、全国に散在するため、長尾(1952)のいう両者は「多元的発生」によって生まれたと考えられる。つまり、長崎出身信徒の周辺で用いられていた「旧信者」が、長崎以外の信徒にも用いられるようになる中で、その時代、その集団、その人の信仰生活にとって最も大きな出来事(戦争、公会議、海外移住)を境にして

「新・旧」が分かれたりようになった、と解釈できる。同じ集団内における新・旧を分かつ言葉の例としては、ア) 日系南米移住者の「新移民・旧移民」、イ) 相馬移民に対する「新百姓」(太田 2013)、ウ) 広島市内某女子校における「新生・旧生」、エ) ロシア正教会における old believer (古儀式派) などがあり、普遍的な言語現象と言えそうである。

6. 結論, 今後の課題

- ①長崎系カトリック用語には、長崎県外に伝播し、使用されてきた語がある。伝播の背景には、日本の工業化、近代化、都市部(太平洋ベルト地帯)への人口集中がある。
- ②長崎県外に伝播した長崎系カトリック用語には、「ゼンチョ」のように原義が維持・継承されたものと、「旧信者」のように新たな意味が次々と生まれてきたものがある。
- ③残りの調査項目の地図化、解釈研究。
- ④カトリック用語以外に地域性を持つ宗教用語が全国に伝播する例はあるか。
国内外の事例。
→都市言語研究・言語接触研究への貢献(一般化、理論化)。

【参考文献】 ※新聞と辞典類は省略

- 海老沢有道他編(1993)『〈キリシタン文学双書〉キリシタン教理書』, 教文館
- 伊東誠二監(1978)『萌芽 福岡教区 50年の歩み』, カトリック福岡教区
- 太田浩史(2013)『相馬移民と二宮尊徳』第2版, ナカダ印刷
- 小川俊輔(2007a)「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 *Christão* の受容史についての地理言語学的研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』55(2), pp.173-182.
- (2007b)「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 *pater/padre* の受容史についての地理言語学的研究」『国文学攷』192・193, pp.15-25.
- (2007c)「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 *Santa Maria* の受容史についての地理言語学的研究」『国語教育研究』48, pp.38-51.
- OGAWA Shunsuke (2010) On the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16th century, *Slavia Centralis*, III(1), pp.150-161.
- 小川俊輔(2011)「日本社会の変容とキリスト教用語」『社会言語科学』13(2), pp.4-19.
- (2012)「キリシタン語彙の歴史社会地理言語学 —*oratio* オラショを例にして—」陣内正敬他編『外来語研究の新展開』, おうふう, pp.78-96.
- (2013)「南米に移住した長崎のキリシタン家族 —ボリビア多民族国サンフアン日本人移住地の事例—」『キリスト教史学』67, pp.134-156.
- (2014)「キリシタン文化と方言形成 —Jesusの歴史社会地理言語学—」小林隆編『柳田方言学の現代的意義 —あいさつ表現と方言形成論—』, ひつじ書房, pp.265-290.
- カトリック中央協議会出版部編(2013)『カトリック教会情報ハンドブック 2014』, カトリック中央協議会
- 川原義和監(1977)『旅する教会 —長崎邦人司教区創設 50年史—』, カトリック長崎大司教区
- 新村出他校註(1993)『吉利支丹文学集』2, 平凡社
- 長尾勇(1952)「俚語に関する多元的発生の仮説」『国語学』27, pp.1-12.
- 丸山孝一(1980)『カトリック土着 —キリシタンの末裔たち—』日本放送出版協会
- 三好千春(2009)「1960年代の青少年労働者とカトリック教会」『南山神学』32, pp.103-124.
- 明治文化研究会編(1928)『明治文化全集 第19巻 宗教篇』, 日本評論社